

# 「暗殺疑惑」の日本史

## 源頼朝暗殺疑惑

建久 9 年（1198 年）、年の瀬も押し迫った 12 月 27 日、源頼朝は、相模川に架けられた橋が開通した祝いに参列する。この橋は、御家人の稲毛重成が亡き妻のために架けた橋で、その妻は、頼朝の妻北条政子の妹でもあった。

一般に、頼朝はその帰り道、稲村ヶ崎近くで落馬して、そのケガが原因で、約二週間後の翌年の 1 月 13 日に亡くなったということになっている。当時、53 歳だった。しかし、その死因には、非常に不審な点が多い。そもそも、頼朝のような乗馬の達人が、馬から落ちることがあるのだろうか。

もっとも不思議なことは、これほどの重大な出来事が、鎌倉時代の正史である「吾妻鑑」に詳しく記録されていないことである。「吾妻鏡」は、平安末期の源頼朝の挙兵から 87 年間にわたる出来事が日記体で書かれているが、なぜか頼朝の死をはさむ 3 年間の記述が欠落している。頼朝の死については、その死から 13 年もたって、「落馬したのがもとで亡くなり」と触れているに過ぎない。落馬の原因さえ、記録されていない。

それでも、この「吾妻鑑」の記述を根拠に、頼朝の死因は落馬というのが通説とはされているが、不審点が多いこともあって、昔から様々な異説が唱えられてきた。そのなかには、むろん暗殺説も含まれる。その場合、最大の容疑者となるのは、やはり北条一族である。

頼朝の子である頼家や実朝も、後に北条氏によって力をそがれ、やがて殺害され、幕府の実権は、執権である北条氏に集中していくからである。そうした歴史の流れをみれば、頼朝も北条氏によって抹殺されたという可能性を否定できない。

そこから、頼朝は、橋の開通式に参列した際、その主催者である稲毛重成に毒を盛られ、それが原因で帰路に落馬したという説もある。首謀者は北条時政で、重成は時政の意を受けて実行したとみる説だ。

又、頼朝は、反幕府派の公家たちによる謀略で暗殺されたという説もある。この説は、歌人として名高い藤原定家の日記「明月記」に基づくものだ。

それによれば、頼朝の死後 7 日目に、反幕府派の土御門通親が頼朝の死の知らせを受けながら、知らぬふりをして自分に都合のよい人事を断行。その後、初めて頼朝の死を知ったかの様に驚いてみせ、親幕府派の一掃に成功したという。

しかも、頼朝の死ぬ前には、親幕府派の一条親子が、相次いで不可解な死を遂げていたし、更に幕府が頼朝の二女を入内させようとしたが、これも土御門通親の遣わせた医者薬を飲んで急死している。つまり、土御門通親を筆頭とする反幕府派の公家たちが、幕府の勢力拡大と朝廷への干渉を恐れて、頼朝らを暗殺させたのではないかという。

その他には、頼朝は、愛人のもとへ夜這いに行こうとして、曲者と間違われて襲われたという珍説

もある。曲者が頼朝と判明し、襲った男は即座に切腹しようとしたが、頼朝から「急病で亡くなったことにせよ」と遺言され、それに従ったとされる。

ただこの話は、頼朝が亀の前との浮気などで、妻の政子を悩ませたことが多かったことから、死因と浮気を結びつけた俗説の域をでない。

## 足利直義暗殺疑惑

元弘3年(1333年)、後醍醐天皇は、足利尊氏や新田義貞、楠木正成らと鎌倉幕府の打倒に成功する。これによって後醍醐天皇を中心とする建武の新政が始まるが、次第に武士たちの不満が高まると、尊氏は、武力蜂起し、弟の直義と共に光明天皇を擁立する。

これに対して、後醍醐天皇は奈良の吉野に逃れ、光明天皇に譲った三種の神器は偽物で、自らが帯同したものが真物と宣言して、こちらも朝廷を開いた。ここに南と北、二つの朝廷が並び立つ南北朝時代がはじまった。

暦応元年(1338年)、尊氏は、光明天皇から征夷大將軍に任じられて室町幕府を開き、武家政治を復活させる。その後、尊氏は、南朝を支持した新田や楠木一族を打ち破って、南朝を弱体化させ、あと一步で滅亡というところまで南朝を追い詰めた。

ちょうどそんな時期に、尊氏の弟の直義が急死する。表向きは病死とされたが、世間は毒殺と噂し、毒を盛ったのは尊氏だったといわれた。そういう話が流れるほど、鎌倉幕府打倒のため、いったんは力を合わせた兄弟だったが、権力を手に入れたとたん、歯車がかみ合わなくなり、戦にまで及んでいたのだ。

室町幕府の開府直後までは、二人は役割を分担してうまくやっていた。尊氏は政務から距離をおいて、武士の棟梁として君臨。代わりに政務を執ったのが、左兵衛督に任じられた弟の直義である。直義は兄の期待に応えて、副將軍として幕政を仕切り、兄と二人、「両將軍」と呼ばれたほどだった。しかし、直義は、足利家の執事である高師直と対立する。師直は、鎌倉幕府や南朝との戦いで多くの功績を残して名を挙げ、將軍家の執事として強大な力を振るうようになっていた。師直は、直義の政治方針に不満をつのらせ、二人は事あるごとに対立するようになった。

やがて師直は、直義側近の画策によって執事職を解かれた際、挙兵して京都の直義邸を襲撃する。尊氏の斡旋によって、両者はいったんは和解するが、尊氏自身も直義と対立することが増えていたので、これを機会に直義を出家させ、引退させた。こうして、幕府内から直義派は一掃され、尊氏と師直の連立体制ができあがったのである。

ところが、出家をしても怒りのおさまらない直義は、観応元年(1350年)11月、挙兵する。しかも、直義は意外な作戦をとる。敵対していたはずの南朝から、師直とその弟の師泰追討の諭旨を得たのである。南朝は衰えていたとはいえ、勅命の権威は絶大である。南朝・直義連合軍は瞬く間に勢力を拡大し、京へと攻めのぼった。

尊氏と師直は迎え撃つが、直義軍の勢いに苦戦。追い詰められた尊氏は、一時は自刃まで考えたといわれる。だが、直義には兄を討つことはできず、結局、師直・師泰兄弟の引退を条件に尊氏と和睦を結んだのだった。

その後、師直・師泰兄弟が、彼らに遺恨を抱いていた武将に暗殺される。直義がこれを黙認したこ

とが、さらに尊氏の心証を悪くした。それでも、二人は表面的には何もないように装っていたが、直義が尊氏の子義詮とも対立しだすと、尊氏の我慢も限界に達した。今度は、尊氏が南朝と和睦して、直義追討の論旨を得る。そして、二人は相模の早川尻で対決。直義が降伏すると、尊氏はその身柄を鎌倉の延福寺へ送った。

直義は、文和元年（1352年）2月、延福寺で突然吐血し、ほどなく死亡した。幕府は、黄疸という病におかされたと発表した。世間には幕府側が中国から取り寄せた猛毒を飲ませたという噂が広まった。人々は、尊氏が直義をあの手へ送ったとみたのである。

## 足利義満暗殺疑惑

応永15年（1408年）5月、京都北山の山荘（後の金閣寺）から、ひそかに棺が運び出された。その棺のなかには、ほんの一週間前まで、日本の最高実力者として絶大な権勢をふるっていた足利義満の遺体が納められていた。遺体は、祖父にあたる足利尊氏が埋葬されている等持院で密葬された。義満は、すでに將軍の地位を離れ、出家していたとはいえ、元將軍にして実質的な最高実力者だった。それほどの地位の人物が、なぜ密葬にさらされたのか。死因は、一般には咳気、又は流布病と伝えられてきた。今でいえば風邪か流行病である。しかし、義満の不可解な死をめぐっては、昔から暗殺説がささやかれてきた。その首謀者と目されるは、公家の二条満基と一条経嗣、そして義満の長男である義持である。

晩年の義満は、皇位の篡奪さえ狙っていたとみられ、朝廷側の人間にとっては、極めて危険な存在だった。義満は、溺愛していた異母弟の義嗣を天皇に就け、自らは天皇の父として、朝廷の権威さえも、我が物にしようと考えていたとみられるのだ。

そもそも、義満が將軍職を離れて出家したのは、天皇と対等の立場を望んだからである。現実には、当初、征夷大將軍という立場で中国の明と交渉しようとしたところ、（天皇の）臣下とは交渉しないと相手にもされなかった。

そこで義満は、出家して、公家に仕える武士という立場ではなく、公家を超える存在になろうとしたのだ。出家後の義満は、世俗的な権力は保持し続けたうえで、儀式や式典では天皇に準じた服装を身に着けるようになった。

更に、義満は、義嗣を天皇とするための布石を打った。正室の日野康子を准母としたことである。准母は、天皇の母親の代わりになる女性のことで、後小松天皇の母親が危篤状態に陥ったとき、すでに父親（後円融上皇）が亡くなっていたため、義満は「同じ天皇が二度も喪に服することは不吉」と主張して、准母をおくことを認めさせた。

こうして康子が天皇の母親代わりとして、義嗣の元服式を親王と同格の儀式によって執り行ったことで、義嗣は親王とみなされるようになった。つまり、後小松天皇が譲位すれば、義嗣が天皇に成ることも可能になっていたのだ。しかし、義嗣の元服の儀式から、わずか10日後、義満は死んでしまう。それが暗殺だとすれば、その手段は、毒殺だったのではないかといわれる。

首謀者と目される二条満基は、かねて義満の天皇家乗っ取りを強く警戒していた。さらに満基は内大臣であったので、義満のそばに行くことができ、食事に毒を盛ることも不可能ではなかった。

又、関白の一条経嗣は義満が死ぬ数日前に突然関白を辞任し、義満が死ぬと、再び関白に復帰して

いる。この奇妙な行動から、やはり義満の野望に警戒心を抱き、暗殺に加担したのではないかといわれている。

更に、首謀者の一人と目される長男の義持は、日頃から、父への不満を募らせていた。将軍職に就いても、実権を握っているのは父義満であり、自分は義満の操り人形にすぎない。しかも、父は異母弟の義嗣を重用する。これで義嗣が天皇になれば、自分は弟にも仕えなければならない。そうした不満が、義嗣の元服をきっかけとして爆発。父の野望が実現する前に、暗殺を決意したのではないかと考えられる。義持は、父に対する憎悪の強さを見せつけるように、義満の死後、金閣寺を除いたすべての建物を取り壊し、義満の政策をことごとく否定している。

## 毛利隆元暗殺疑惑

毛利元就といえば、「三矢の訓え」という逸話で広く世間に知られている。元就は、死ぬ直前、毛利隆元、吉川元春、小早川隆景という3人の息子を枕元に呼び集め、「1本の矢は簡単に折れるが、束ねられた3本の矢は折れにくい。兄弟が力をあわせて毛利家を守るように」と言い遺したという故事である。

しかし今日、この話はフィクションだということがわかっている。元龜2年（1571年）、元就が亡くなった時、長男の隆元はすでにこの世を去っていたからだ。なぜ隆元は、父より先に亡くなったのだろうか？

隆元が急死したのは、永禄6年（1563年）8月4日の朝のことだった。伝えられるところによると、死因は食中毒といわれるが、その一方で毒殺説もささやかれ、現在なお真相はわかっていない。では、亡くなる前夜、隆元は何を食べたのかというと、安芸高田郡佐々部の名産である鮎だったと伝えられている。隆元は、出雲の尼子氏攻めのために、7月から佐々部に滞在中で、そこで毛利氏傘下の南天山城主・和智誠春に招かれ、酒や食事などのもてなしを受けたのだった。

ところが、隆元はその晩から腹痛を訴え、翌朝には急死してしまった。当然、父親の元就は、この突然の訃報に嘆き悲しんだ。元就は、ショックのあまり卒倒し、しばらくの間、泣き続けたと伝えられている。そして隆元の死因を毒殺だと考え、その後、元就は犯人探しに躍起になるのである。まず元就は、隆元に食事をふるまった誠春、隆元に同行していた毛利家の家臣赤川元保を暗殺犯と考え、城に呼び出した。しかし、赤川元保がこれを拒んだため、元就は元保に切腹を命じ、元保の弟や養子までも自刃に追い込む。

そして、誠春に対しても、弟と共に厳島に監禁し、最後は脱走したところを捕らえ、兄弟もろとも殺害する。こうして事件に関係のありそうな人物を、元就は片っ端から処分したのである。毛利元就といえば、広島の名門豪族から、1代で中国地方の大大名にのし上がった武将である。それほど的人物が、このような処置をとったのだから、隆元が暗殺されたことは、ほぼ間違いないようにも思える。ただ、後に元保は、隆元が誠春のもとへ行かないよう、引き止めていたことが判明している。元保は、冤罪で切腹に追い込まれていたようでもある。

では、隆元に食事をふるまった誠春が犯人だったのかというと、こちらにも確固たる証拠はない。当時の史料には、誠春が隆元を暗殺しなければならないような理由が見当たらないのである。結局、嫡男を失った悲しみが、元就をそれほどまでに追い込んだといえるのかもしれない。事実、の

ちに元保が潔白だったことを知った元就は、自身の行ないを深く恥じ、家門断絶に追い込んだ赤川家を再興させている。こうして真相が明らかにならないまま、隆元亡き後、実質的な当主は引き続き元就がつとめることになった。

## 武田信玄暗殺疑惑

武田信玄が死去したのは、天正元年（1573年）4月12日のことだった。亡くなる直前、信玄が周囲に「わが死を3年間、秘せ」と伝えた話は有名である。

しかし、信玄の遺言どおりに事は進まず、その死はほどなくして、上杉謙信、織田信長、徳川家康たちに知れ渡ることになった。では、信玄の死因は、いったい何だったのだろうか？信玄が死んだ原因には諸説あるが、そのうちの一つに、暗殺未遂事件で受けた古傷が悪化したという説がある。例えば、黒澤明監督作品の映画「影武者」も、この説にのっとってプロットが組まれている。

その節によると、信玄が三河国野田城を攻めている時、城から夜ごと笛の音が聞こえてくるので、信玄はしば聞き惚れていた。すると、鳥居三左衛門という鉄砲の名手が信玄を狙撃し、右肩に重傷をおわせたというのだ。

確かに、破竹の勢いで進軍していた武田軍が、城を落とすのに1ヶ月もの期間を費やしているところをみると、野田城で信玄の身に何かあったと考えても不思議ではない。ただ、その傷がもとで死にいたったかという点、その確証はないのが現状である。

その一方で、信玄の死因は病死だったという意見も多い。そのなかでも、よく指摘されるのが、労咳である。

労咳は、今日でいう肺結核のことで、結核菌に感染することによっておこる病。微熱や疲労感にはじまり、病状が進行すると咯血などの症状がみられ、放置すれば高い割合で死に至る病気として知られる。

ただ、肖像画などに残された信玄の体格から想像すると、肺結核だったとは考えにくいとして、肺がん、胃がん、食道がんなどを疑う説もある。

いずれにしても、残された当時の資料に「信玄は胸部から腹部にかけて患っていた」という記述がみられるので、信玄が何らかの病にかかっていた可能性は高いとはいえそうだ。

そんな病気死亡説のなかでも、異説として知られているのが、信玄が、「日本住血吸虫病」という病で亡くなったのではないかという見方である。

日本住血吸虫病は、高熱がでる一種の風土病。病名にある日本住血吸虫は、ほ乳類に寄生する寄生虫の一種で、ミヤイリガイの幼虫などを中間宿主として成長をとげる。やがて人や犬、猫などに寄生して、肝臓やそのほかの内臓をおかしていくのだ。

日本住血吸虫病にかかり、そのまま放置すればやがて死に至るので、戦国の雄の命を虫が奪っていたとしても、おかしくない。尚、日本住血吸虫病が、信玄の時代の甲州に存在したことが、文献から確認されている。

## 蒲生氏郷暗殺疑惑

戦国から安土桃山時代にかけて活躍した蒲生氏郷は、豊臣秀吉にも一目置かれた武将だった。そのため、文禄4年（1595年）2月7日、氏郷が急死した際には、秀吉が毒殺したに違いないという噂が流れた。秀吉は、氏郷の力を脅威に感じ、暗殺したと考えられたのだ。その後も、毒殺説は根強くささやかれつづけ、石田三成や伊達政宗などの名が、暗殺の実行犯としてあがるようになった。

話をさかのぼると、蒲生氏郷の才能をいち早く見抜いたのは、織田信長だった。信長は、人質としてやってきた当時13歳の氏郷を見て気に入り、自分の娘を嫁にやったほどである。こうして、信長の義理の息子になった氏郷は、以後、信長の戦いに従軍し、数々の戦功をあげる。信長亡き後は秀吉に仕え、秀吉のもとでも多くの戦功を重ねた。その働きぶりから氏郷は、秀吉より羽柴姓を与えられている。

しかし同時に、秀吉は、武勇にすぐれ、諸大名からの人望もあつた氏郷を脅威にも感じていた。そこで秀吉は、氏郷に会津42万石を与え、徳川家康と伊達政宗を監視させる役目を与えた。

伊勢12万石の大名だった氏郷にとって、関東及び奥州の要地である会津を任されたのは、周囲からは大出世にみえた。

ところが、周囲の祝福の声をよそに、氏郷はこの転封に落胆し、涙したといわれる。領地が狭くとも、都のそばにいれば天下を狙うこともできるが、遠く離れてしまえば、広大な領地をもっていたところで、そのチャンスはめぐってこないと考えたからだといわれる。

事実、秀吉の真の狙いは、氏郷を都から遠ざけることにあった。周囲の人々は、会津の地を任せるとのなら、細川忠興が適任ではないかと考えていたが、秀吉は小田原征伐の論功行賞であると思わせかけて、氏郷を遠く離れた会津の地に追いやったのである。氏郷も、秀吉の考えがわかったからこそ、涙を流して残念がったのかもしれない。

では、秀吉は、氏郷を都から離れた会津に送るだけでは飽き足らず、毒殺までしたのだろうか？ それに関しては、氏郷を診察した医師の診断書が残っているが、それによると、彼は毒殺されたのではなく、がんで死んだ可能性が高いといえる。

その診断書によると、会津に移ってからの氏郷には、黄疸、浮腫、血便などの症状が出ており、何らかの病気で体調を崩していたと考えられるからだ。

そうして氏郷は、京都に出て来たとき、伏見の蒲生屋敷で、40年の生涯を閉じた。キリシタン大名だった氏郷は、同じくキリシタンの高山右近に看取られながら、懺悔の言葉を口にし、息をひきとったといわれている。

## 加藤清正暗殺疑惑

豊臣秀吉に仕えた武将・加藤清正の死をめぐるのは、古くから暗殺説が囁かれてきた。清正が亡くなったのは、慶長16年（1611年）6月24日、熊本城でのこと。享年50で、死因は病死と言われているが、病名がはっきりしないため、毒殺されたと考えられるようになった。

一説によると、加藤清正に毒を盛ったのは、徳川家康だったという。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いで、家康は天下をほぼ手中におさめ、大坂城にいる豊臣秀頼を従わせるため、秀頼を上洛させて対面しようと考えた。

しかし、この計画に秀頼の母親である淀殿が猛反発。家康のほうから秀頼に会いに来るべきである

として、家康の要求を拒否したのだ。

ただ、家康のほうもそれであきらめることなく、手を変え品を変え、秀頼に面会を迫った。そうして慶長16年(1611年)3月28日、両者は二条城で会見を行うにいたったのである。

その会見に同行したのが、加藤清正や浅野幸長など、かつて豊臣政権を支えた武将たちだった。特に加藤清正は、秀頼の上洛を実現させた立役者だったと言われている。

結局、二条城での会見は、特に問題もなく、おだやかに進んだ。とはいえ、秀頼を守るために同行した清正や幸長の気苦労は、大変なものだったと思われる。清正は胸に短剣を忍ばせて、万が一の事態がおこった場合には、家康と刺し違える覚悟だったとも伝えられる。

こうして無事会見はすんだものの、その後、清正と幸長の身に相次いで異変が起こる。清正は同年6月、幸長は慶長18年(1613年)8月と、立て続けに息を引き取ったのである。そこで浮上したのが、家康による毒殺説だ。それによると、家康は、二条城の会見の際、ふるまった饅頭に毒を仕込んだというのだ。清正や幸長はそのことに気付いていたが、自分たちが饅頭に手をつけなければ、家康に怪しまれると思い、秀頼には食べさせないように注意しながら、自分たちは食べた。その結果、清正は3ヶ月後、幸長は2年後に毒がまわって死んだのだという。しかし、毒を口に入れたにもかかわらず、3ヶ月後や2年後に命を落とすことが、はたしてあり得るのだろうか？

確かに、当時よく使われた毒は、効き目の遅いヒ素が一般的だった。又、死ぬ直前の清正には、体が黒くなるなど、ヒ素中毒に近い症状が出ていたという記録もある。

とはいえ、いくらヒ素の効き目が遅いといっても、せいぜい半月以内には効きはじめる。やはり、二条城の会見から3ヶ月後に死んだ清正は、何らかの病気で命を落としたとみるのが妥当のようだ。おそらく、会見に同行した清正と幸長が、相次いで死んだことが、毒殺説を生み出したのだろうと考えられる。さらに、歌舞伎や浄瑠璃が「毒饅頭事件」を好んで取り上げたことも、人々に清正毒殺説を植え付けた。現在でも、清正の死因は明らかになっていないが、毒殺説以外では、熱病や脳出血などの病気が可能性としてあげられる。

## 徳川綱吉暗殺疑惑

5代将軍・徳川綱吉が亡くなったのは、宝永6年(1709年)1月10日のことだった。そして、綱吉の死後1ヶ月もたたない同年2月7日、あとを追うように死去した人物がもう1人いた。綱吉の正室、鷹司信子である。

この夫婦の死は、あまりにも突然だったために、その後、思わぬ憶測を呼ぶことになった。妻信子が綱吉を刺し殺し、自らも命を絶ったというのである。

その言い伝えによると、信子はお付きの老女とともに、夫を刺し殺した。そして信子は老女と刺し違えて、自らも命を絶った。事件のあった部屋は血の海となり、その部屋は「開かずの間」として、幕末まで封印されていたという。

確かに事実として、綱吉と妻信子は相次いで亡くなっている。では、信子に綱吉殺すような動機があったのだろうか？1つには、綱吉が自らの隠し子を次の将軍にしようとし、信子がそれに強く反対していたからという説がある。

綱吉の隠し子とは、家臣・柳沢吉保の子である吉里のことで、当時から吉里は綱吉の「御落胤」で

はないかという噂が流れ、綱吉は吉里に將軍の座を譲るのではないかとみる向きがあったのだ。そして、綱吉との間に子供がいなかった信子は、この吉里を跡継ぎにすることに強く反対していたというのだ。

又、綱吉の祖父・秀忠の代までさかのぼると、信子と徳川家との間には、浅からぬ因縁があったという指摘もある。かつて秀忠が、後水尾天皇の中宮として、娘の和子を嫁がせようとしたとき、信子の母親と祖母の存在が邪魔になるとして、宮中から追放したことがあったのだ。信子は、そのような一件の後、徳川家に強い怨みをかかえたまま、正室として輿入れしてきたというのである。だが、これらの理由で信子が夫を刺したかという点、実際のところはよくわからない。綱吉と信子が、ほぼ同時に亡くなっているのは不自然ではあるが、通説としては2人とも病死だったと語られてきたのだ。

例えば、その死因が、当時猛威をふるった「はしか」によるものだとしたら、ありえない話ではないだろう。綱吉から信子に病気が感染したため、夫婦がほぼ時を同じくして死んだのである。なお綱吉と信子夫婦は、2人そろって、東京都台東区上野の寛永寺に埋葬されている。

## 徳川家定暗殺疑惑

徳川將軍歴代15人のなかで、5代將軍・綱吉と同様に暗殺の疑いをもたれているのが、13代將軍・家定である。家定は35歳のとき、突如死去する。死因は脚氣と推定されているが、死後すぐに暗殺の噂が立った。

家定は、將軍としては実に凡庸な人物だったが、近年は天璋院篤姫の夫として有名になった。そんな凡庸な存在である將軍が暗殺を噂されるのは、時代の成せる業である。家定の將軍在位時代は、過去の將軍とは比べられないほど苛烈な時代だったのだ。

家定が13代將軍となったのは、嘉永6年（1853年）11月23日のこと。同年6月3日には、アメリカのペリー提督率いる黒船艦隊が浦賀にあらわれ、日本に開国を迫っていた。ペリー艦隊はいったん日本を離れるが、その直後、12代將軍・家慶が病死、その子・家定が13代將軍の座に就いたのだ。

その後、徳川幕府は、アメリカをはじめとする列強の武力という現実を前にして、通商条約を結ぶかどうかで揺れ動く。これに、將軍継嗣問題が絡んで、複雑な政治情勢が生まれることになった。將軍継嗣問題とは、家定の次の將軍を誰にするかという問題だ。家定は17歳の時に疱瘡を患ったことがあり、また脳性麻痺だったと医学的に推定されている。それもあって、家定には子がなく、今後、できるとも思えなかった。將軍に実子がないときは、御三家、御三卿から継嗣を擁立することになっていたが、誰を継嗣にするかでもめにもめることになった。継嗣候補となったのは、紀州藩主の徳川慶福と御三卿の一橋家の慶喜である。そのうち、一橋慶喜は水戸の徳川斉昭の実子であり、一橋家の養子となっていた。

一橋慶喜を推したのは、幕政改革を求める幕閣や雄藩の藩主らである。彼らは、日本の現状に強烈な危機感を抱いていた。病弱の家定にとって、危機の時代を乗り切るのは荷が重すぎる。そこで、実力のある人物を將軍の継嗣に立てて、動乱の時代を乗り切り、日本を欧米型の国家に変えていきたいと考えていた。そのために、英明の誉れ高い一橋慶喜を推したのである。



一方、徳川慶福を推したのは、譜代大名たちである。徳川慶福は13代将軍・家定の従兄弟にあたり、血筋では慶喜よりも近い。慶福が次期将軍となることこそ自然の流れであり、彼らは幕政はいまのままでよいと考えていた。

薩摩の篤姫が徳川家定の正室として送り込まれたことにも、将軍の継嗣問題が絡んでいる。薩摩藩主・島津斉彬は慶喜擁立をめざし、篤姫を大奥に送り込んだのだ。しかし、篤姫一人でどうなるものでもなく、結局のところ、大奥は水戸家を嫌い、紀州・徳川慶福側に流れてしまう。そんな混沌を一気に収束させたのは、安政5年（1858年）4月23日、大老に就任した彦根藩主・井伊直弼である。独裁的な力ふるう大老の登場によって、問題は解決されていく。井伊直弼は、5月1日には継嗣を徳川慶福に内定、6月19日には日米修好通商条約に調印する。

そして、6月25日、幕府は徳川慶福を継嗣に決定したと発表した。慶福はやがて14代・家茂となる。これで問題も決着し、ひと安心といったところだが、その日、江戸城・松の廊下で家定は突然、倒れてしまったのだ。家定は回復することなく、7月6日に死去する。家定の死は、およそ1ヶ月後の8月に公表された。すぐに噂されたのが、毒殺説である。

35歳という年齢に加えて、突然の死である。そこに不自然なものを感じとった者も少なかった。暗殺の黒幕視されたのは、一橋慶喜擁立派である。慶喜を擁立した者たちは、継嗣を勝手に決めた井伊直弼の専横が憎くてならなかった。そこで、井伊直弼の足を引っ張ろうと、将軍・家定に毒を盛り、殺したという見方である。

当時、この毒殺説を裏付けたのは、家定の死去した7月6日に、奥御祐筆の志賀金八郎が自殺したことである。そこから、志賀金八郎がある者の意を受けて、家定を毒殺したかのように語られはじめた。だが、実際のところ、毒殺説を裏付ける証拠は何もなく、将軍・家定の死が暗殺であったかどうかは、いまもわかっていない。

暗殺ではなく、コレラによる病死という説もある。当時、日本で初めてコレラが流行していた。将軍付きの奥医師といえども、コレラについて知識はないに等しい。そのため、将軍がコレラにかかっていることを見落とし、病死させてしまったとも考えられる。

医学的にみて順当なのは、脚気と長年の心労が重なったの死だ。ペリー来航以来、幕政を背負ってきたのは、老中・阿部正弘である。阿部正弘は、30代の働きざかりだったか、心労が重なり、ついには動けなくなった。安政4年（1857年）、39歳という若さで死去している。健康な阿部正弘でさえ、ストレスから死にいたったわけで、病弱な家定には、将軍継嗣問題、条約調印問題があまり重かったのかもしれない。加えて、脚気は夏場、悪化しやすい。もともと脚気だった家定は、夏の訪れとともに脚気を悪化させ、息をひきとったとも考えられる。同じく脚気で死去した14代家茂の死も、やはり夏である。

## 孝明天皇暗殺疑惑

幕末の暗殺に貴賤はなかった。君主であろうとも、ターゲットになる可能性があった。暗殺の疑いが強く残るのは、孝明天皇である。

孝明天皇は、明治天皇の実父。ペリー来航にはじまる幕末の動乱にあって、重要な役割を果たした天皇で、幕府は、孝明天皇の好意を得ることで、公武合体を図り、幕末の難局を乗り切ろうとした。

その孝明天皇が崩御されたのは、慶応2年12月25日のこと。発病は、同年12月11日である。病は疱瘡であり、一時は回復に向かうものの、ふたたび病状は悪化して、崩御された。まもなく、暗殺説がささやかればはじめ、暗殺の黒幕と目されたのは、岩倉具視である。孝明天皇は、岩倉を嫌っていた。それもあって、岩倉は京都の僻地・岩倉村に追放され、蟄居の身となっていた。孝明天皇の没後、岩倉は復活、朝廷の中心人物となり、倒幕をめざす。孝明天皇が存命であったら、岩倉の復活はまず不可能であり、朝廷が倒幕派で占められることはなかった。孝明天皇の崩御によりもっとも得をしたのは、復権した岩倉であり、そこから岩倉が疑われたのである。

暗殺説に立つと、岩倉の背後で動いていたと思われるのは、薩長である。孝明天皇が崩御された慶応2年は、激動の年であった。まず、薩摩藩と長州藩がひそかに同盟を結ぶ。幕府は、第二次長州征伐の軍を起こすが、幕府軍は体制を一新した長州軍の前に敗北する。幕府の威信が地に墮ちるなか、14代将軍・徳川家茂が病死。代わって、一橋慶喜が15代将軍・徳川慶喜となるが、薩長連合は徳川幕府に代わる新政権樹立を目論見はじめていた。

この時、障害となると考えられたのが、孝明天皇である。

孝明天皇は、将軍・慶喜に信頼を寄せ、幕府対して協調的な姿勢をとっていた。幕府がかつてのように巨大な権力をもつのは避けたいとは思っていても、幕府を滅ぼす必要はないと考えていた。そんな佐幕派の帝の存在は、倒幕をめざす薩長には邪魔だったのである。

又、孝明天皇は、外国嫌いとしても知られていた。数年前までは長州も薩摩も攘夷を唱えていたが、それぞれが外国と戦争をするなか、考え方を変えていた。内心では開国派となっていた薩長の幹部にとって、外国嫌いの天皇の存在は、このあとお荷物になるとも思われた。

そんな考えをもつ薩摩・長州が岩倉に近づき、結託したとも考えられる。

実際のところ、岩倉は、孝明天皇の死去する半年くらいまえから、王政復古論者となっていた。岩倉は、もとは和宮降嫁を主導したくらい佐幕派の人物だったが、すでに転向していたのである。岩倉は公卿らを次々と説いて回り、1866年8月には同調した公卿22人を動かして、王政復古への建議をおこなわせ、これが、孝明天皇を更に怒らせる結果にもなっていた。岩倉黒幕説に立つと、実行犯となったのは、孝明天皇の愛妾・堀河紀子といわれる。岩倉具視は堀河家の生まれであり、堀河紀子は彼の姉妹に当たっていた。

ただ、孝明天皇が暗殺されたというのは、あくまで疑惑の域を出ない。暗殺の証拠となるものは、全く存在しないのだ。孝明天皇暗殺説が出回ったのは、一つには36歳という年齢での病死が不自然とする見方である。ただ、それを不自然とみるかどうかは、微妙なところだ。西洋医学がほとんど導入されていない江戸時代、30代での病死はそう珍しいことではなかった。江戸時代の天皇の崩御の年齢をみていくと、後光明天皇22歳、東山天皇35歳、中御門天皇37歳、桜町天皇31歳、桃園天皇22歳、後桃園天皇22歳と、20代、30代での病死が少なくない。

又、後世に毒殺説を広めたのは、イギリス大使書記官アーネスト・サトウの記述である。その記述には「重要な人物の死因を毒殺に求めるのは、東洋諸国では、ごくありふれたことである。」という一節があるが、こと日本に関する限り、毒殺は一般的ではない。戦国武将でも、毒殺説はそう多くない。サトウの「東洋＝毒殺。日本もそうだろう」という思い込みが、孝明天皇毒殺説を補完したともいえる。サトウの記述が明治維新の史料となったため、いたずらに毒殺説が広まったとも考えられる。